

# 眼鏡フリーを実現する「レーシック」

## 老眼世代にも広がる最新の治療とは？

近視や遠視・乱視を10分ほどのレーザー治療で解消、裸眼での生活が可能になることで人気のレーシック。1990年代に欧米で普及しはじめ、日本でもここ数年で急増し、年間40万件ほどの治療が行われていると報告されている。また近年、老眼に対する新しい治療もスタートしており、40代以降の老眼世代にも眼鏡フリーの道が開けてきている。ポピュラーな治療となり、治療を行う施設数も増えている中で、治療の質を問う声も聞かれる。治療の専門家と手術経験者の双方取材した。



写真資料提供/南青山アイクリニック

### 安全と安心には理由がある

『レーシック』とは、レーザーで角膜を微細に削って、屈折を変化させて視力を回復させるという治療である。実用からすでに20年以上が経過し、1995年にFDA（米食品医薬品局）、日本では2000年に厚生労働省が眼科でのこのレーザーの治療を認可している。


日本で1997年に眼科専門医の施設として近視治療を導入したいわばパイオニア的存在として知られる南青山アイクリニックの戸田郁子理事長は、「当時、アメリカで近視等に対するレーザー治療が普及しはじめており、安全な治療のためには角膜治療に詳しい眼科専門医が行う必要があると考え、クリニックを立ち上げました」と語る。

2007年に象徴的な事件が起きた。非眼科専門医の治療で67名の集団感染が起きたのだ。

「あの事件は眼科の手術として通常なされている衛生管理がされておらず、本来有り得ない事象です。私たちはこれまでに6万件ほどの手術を行っていますが、衛生管理を徹底しており感染症は経験していません」と戸田医師。

日本では、医師免許があればどの科も標榜できる。地域医療としては有用なシステムであるが、専門的な手術は専門医の治療がベストであろう。

現在、レーシック手術は、そのすべての工程でレーザーを使用するようになってきた。治療



南青山アイクリニック理事長。眼科専門医、医学博士。角膜移植などの角膜治療に詳しい。1997年に南青山アイクリニックを開業。以降「レーシックの母」と呼ばれるほど、日本におけるレーシック治療の第一人者として全国の眼科からの紹介で多数のレーシックを担当している。

戸田 郁子 先生

精度が高く、米国防省、NASAも推奨する治療システムが「iLASIK®=アイレーシック」である。

### 術前・術後の重要性

アイレーシックは、iFS（フェムトセカンド）レーザーを用いたレーシックの名称で、夜間の見え方の質などが向上した。

「このシステムにより治療の質が一段と向上しました。術者の技量に委ねられる部分も少なくなりました。しかし、手術適応の診断、レーザー照射のデータ作成のための検査、術後のフォローなどのすべてを含めて、手術として完成したものになります。その方のご年齢やライフスタイルに合わせた治療の選択も、手術後の満足度に大きく影響します。また、手術後に一時的に起こりうるドライアイ等の適切なケアも大切です」と戸田医師は語る。

どんなに優れた科学技術で

も、それを扱うのは「人間」であるということだ。


10年ほど前にレーシックを受けた会社員の男性はこう話す。「裸眼で生活できるのは何より快適。100m先の芝生にゴルフのボールが落ちるところまで見えた時は本当に感動しました。災害時のことを考えても受けて良かったと思う。受ける前は不安だったので、まずはかかりつけの眼科の先生に相談し、施設を紹介してもらいました。信頼出来る先生に相談するのが一番安心でしょう」

### 老眼世代にも朗報

40歳以降でレーシックを受けるときの問題が老眼だ。遠くも見たいが、近くも見たい。このような世代に対していくつかの治療法が出てきている。まずは『モノビジョン・レーシック』。一方の目を遠方に合わせ、もう一方をほんの少しだけ近視の状態にする。脳がこの状態に慣れてくると、両目で遠くも近くも見えるように感じられてくるという。

老眼治療に詳しい、みなとみらいアイクリニックの荒井宏幸医師は、「左右の視力の大きな差は目に負担を与えますが、軽度の差であれば便利に使いこなせる人も多い。事前にコンタクトレンズなどで体感できます。その他にも、老眼矯正用のリングを用いた治療『アキュフォーカス』など、いくつかの老眼治療の方法があります。白内障のある方は、白内障治療で遠近両用が可能です。私たちが導入した新型の眼内レンズは術後の満足度が非常に高い。いずれにしても、患者様の目の状態と見え方のご希望に最も有効な治療を選ぶことが大切です」と語る。

老眼治療を受けた50代の女性は、「手術のデメリットも最初にきちんとお話しいただきました。施設や治療についてもかかりつけの眼科の先生のご意見を聞いてから決めました。老眼鏡が不要になり快適です」と語る。



医療法人社団ライト理事長。クイーンズアイクリニック院長、みなとみらいアイクリニック主任執刀医。眼科専門医、医学博士。自身が1997年に米国でレーシックを受け、以降、日本におけるレーシックの第一人者に。最先端の遠近両用の白内障治療でも全国から患者が訪れる。

荒井 宏幸 先生

せ、もう一方をほんの少しだけ近視の状態にする。脳がこの状態に慣れてくると、両目で遠くも近くも見えるように感じられてくるという。

老眼治療に詳しい、みなとみらいアイクリニックの荒井宏幸医師は、「左右の視力の大きな差は目に負担を与えますが、軽度の差であれば便利に使いこなせる人も多い。事前にコンタクトレンズなどで体感できます。その他にも、老眼矯正用のリングを用いた治療『アキュフォーカス』など、いくつかの老眼治療の方法があります。白内障のある方は、白内障治療で遠近両用が可能です。私たちが導入した新型の眼内レンズは術後の満足度が非常に高い。いずれにしても、患者様の目の状態と見え方のご希望に最も有効な治療を選ぶことが大切です」と語る。

老眼治療を受けた50代の女性は、「手術のデメリットも最初にきちんとお話しいただきました。施設や治療についてもかかりつけの眼科の先生のご意見を聞いてから決めました。老眼鏡が不要になり快適です」と語る。

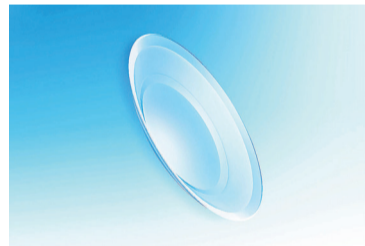
### 手術なしの視力回復法も

手術には抵抗がある…という人には『オルソケラトロジー』という治療法が登場している。これは角膜矯正用のコンタクトレンズを夜間睡眠中に装用し、

いわば角膜をプレスして「くせ」をつけることで、近視や乱視を矯正する方法だ。日中は裸眼で生活ができる。最近、日本人の角膜形状に適した角膜矯正用コンタクトレンズも開発されている。

「手術ではないために安易に考えがちですが、その治療原理から、強い近視や遠視、乱視には適しません。やはり適応をきちんと守ることと、角膜の健康状態を見守っていくことが重要です。適応を守り、しっかり眼科でケアしていけば、オルソケラトロジーもレーシックもメガネをはずしたい方にとって有効な治療の選択肢と考えます。レーシックと同様に眼科専門医の治療を受けていただきたいと思います」と、南青山アイクリニックの戸田郁子医師。

大切な目の治療である。いずれも眼科の医療であるという認識が必要だ。眼科専門医については日本眼科学会のホームページ (<http://www.nichigan.or.jp/>) で検索できる。



オルソケラトロジーに用いる角膜矯正用レンズの一例。日本人の角膜に合わせて設計された「プレスコレクト」(CG画像)

## 「レーシックは本当に安全？」

坪田一男氏(慶應義塾大学医学部眼科教授・日本屈折矯正手術学会理事・日本角膜学会理事)に聞く

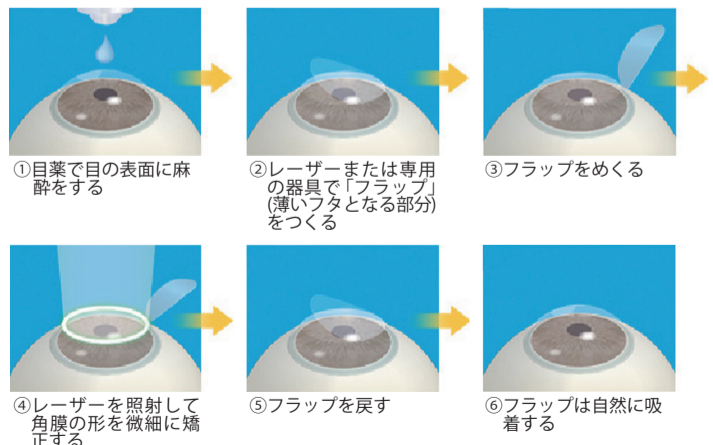
メガネをかけたくない、コンタクトレンズが使えないという人にとって、レーシックは価値ある医療技術といえます。眼科医も受けている人がたくさんいます。

どんな治療でもそうですが、適応を守ることがまずは第一です。矯正量が増えると角膜を多く削ることになり、合併症の率も高まり、術後の見え方の質が低下することも起こり得ます。そのような場合はレーシック以外の治療を検討していただくこともあります。角膜治療に詳しい眼科専門医のもとで、適切な治療方法を選び、治療の内容についてよくご理解された上で、受けていただきたいと思えます。

インターネット上の一方的な広告宣伝の情報

からは、一般の方にはなかなか判断が難しいということ、我々は『安心レーシックネットワーク』という情報サイトを開設しています。眼科医同士がレーシックの患者さんを紹介しあえる全国ネットワークです。手術を決める前にチェックしていただきたいことも提示しています。インターネットの情報は審査もなく、宣伝本位のものが多い。ウェブサイトの情報だけで決めてしまわずに、まずは近くの眼科でご相談されることをおすすめします。

●安心LASIKネットワーク  
<http://safety-lasik.net/>



レーシックの術式は、角膜表面にフラップと呼ばれるフタを作り、それをめくってレーザーで角膜を微細に削り屈折を矯正し、フラップをもとに戻す。フラップは自然に吸着して、縫合の必要はないため、短時間で視力回復が可能となる